

石田梅岩の理念と現代の道德教育
A Study of Baigan ISHIDA's *Tohimondou*
- The Relation between his Beliefs and a Moral Education
in Modern Preschool and Elementary School -

平田 千秋

HIRATA Chiaki

Abstract: Around 1730 Baigan ISHIDA (1685 - 1744) , the first advocate of “ Sekimonshingaku ” , the study of commercial morality, believers of which have a high standard of morality, preached that merchants should lead moral lives. ISHIDA preached about his firm belief that profits earned by the merchant class should be spent on the weak, in order to build a better society. He also encouraged the lower classes to value education, courage, independence, to have patience in adversity, and to be advocates for those weaker than themselves. He believed that studying Shintoism, Confucianism and Buddhism would give people a good sense of morality. The five constant virtues 五常 and the five human relationships 五倫 are Chinese ancient virtues. The five constant virtues 五常 involve humanity, loyalty, courtesy, wisdom and belief. The five human relationships 五倫 involve the devotion of a parent, loyalty, distinction of sex, respect for old age and friendship. If people live in the spirit ,community life will go smoothly, because showing loyalty to others and filial piety, as well as unselfishness, righteousness, diligence and caring for others are fundamental to that spirit. A moral education is also very important. Since a sense of morality can only be easily attained at a very early age, it is best taught in preschool and elementary school. ISHIDA's beliefs are best attained through a moral education.

Keywords: Baigan ISHIDA, "Sekimonshingaku", moral education, *Tohimondou* 石田梅岩 石門心学 道德教育 『都鄙問答』

はじめに

石門心学は、享保時代に現れた石田梅岩を開祖とする学問である。この石門心学は、明和・安永年間から、寛政・享和年間を経て、文化・文政年間におよぶ六・七十年の間に、非常な勢いで全国に普及していった。

その普及する原動力となったのが、弟子の手島堵庵・中沢道二・布施松翁・柴田鳩翁などのすぐれた心学者たちの道話を記した書物や、多数の弟子たちの道話による教えであった。彼らは、京阪ならびに江戸の三都をはじめ、全国に設けられた講舎を中心に、あるいは個人の私宅、寺社の座敷などに、人を誘い、集めて、開祖梅岩の教えを熱心に説きすすめていったのであった。

梅岩は、学問することの成果、効能、効果について、孟子の言葉をあげて述べている。「滕文公篇」第三・上篇、五十にある言葉で、

父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信。此五ノ者ヲ能スル學問ノ功トス（「都鄙問答ノ段」注1）

という。「父子有親」は、父子に親しみあり。父は慈、子は孝で、ひとりでにわく親愛の情をいう。「君臣有義」は、君臣に義あり。義とは正しい道で、君は臣を大事にし、臣は君に忠であることをいう。「夫婦有別」は、夫婦に別があり。夫婦であっても夫は外における夫のつとめがあり、妻は内における妻のつとめがある。それぞれの本文を乱さないことをいう。「長幼有序」は、長幼に順序あり。長者を先にし、幼者を後にすることをいう。「朋友有信」は、朋友に信まことあらしむ。朋友を信じ、偽り欺くことをしないことである。信は言葉と心が一致することをいう。これらを知ることが学問の成果、または学ぶということの成果である。「親、義、別、序、信」の五倫説が中国の倫理を支配したことを重視している。「父子有親」の前に、「教以人倫」という。教うるに人倫を以ってし、と読み、人倫道德を教えるためには五倫を必要とした。五倫は、『孟子』の「教以人倫」にもとづき、明人が使いはじめたものである。人間関係を規律するこの徳目を、梅岩の教えの基本に据えたのである。

この五つのものをよくわきまえて、よく身に付けて実行できるように教えることで、学問の効果を知らせたのである。

梅岩は、「人倫ノ大原八天ニ出テ、仁義禮智ノ良心ヨリナス」といい（「都鄙問答ノ段」注

2) 人の道の根本は、天に発するもので、仁・義・礼・智の善心が源であると記している。梅岩は、これらに信を加えた五常が、人間社会に存在するものとし、良心がいつも健全に保たれていることを望んだ。なぜなら、人間の欲は無限であるため、利害とか愛憎とか、名誉心とか支配欲とか、といったようないろいろな欲がつきまとい、良心を見失いがちだからである。

梅岩は、本来の心のあり方を「^{ガクモン}學問ノ道無^{ミチナシ}レ他。 ^{モトムル}求^ノ二^ノ其^{ホウシンヲ}放心一而已矣」(「都鄙問答ノ段」注3)と孟子の言葉を借りて説明する。孟子の「告子篇」第六・上篇、百五十一にみられる。全文の読み下しをあげておこう。

「孟子曰く、仁は人の心なり、義は人の路なり。その路を捨てて由らず、その心を放ちて求むることを知らず、哀しいかな。人は鶏犬の放つこと有らば、これをさがし求むることを知るも、心を放つこと有るに求むることを知らず。学問の道は他なし、その放心を求むるのみ」

仁は本心にかかわる徳、義はその心を実現してゆく手段にかかわる徳である。「学問の道」は道徳修養の方法で、その方法とは、自ら放心している、糸が切れた風船や凧のように離れ去っている時に、本心を取り返そうと勉めるだけだ、という。

良心を自得し、心を会得したものは、「^{カクノゴトキ}如^{カウセキ}是^{コト}君子大徳ノ行跡ヲ見、^{コレ}此ヲ法トシテ、^{ゴリン}五倫ノ道ヲ教、^{ヲシヘ}天ノ命ゼル職分ヲ知セ、^{メイ}身脩ヲサマリテ家^{シヨクブン} 齊、^{シラ}國^{トノヒ} 治^{ヲサマリ}テ天下^{タイラカ} 平ナリ」(「都鄙問答ノ段」注4)という聖人の行いを学んで、自分の評価基準を作ることがわかる。

徳の高い人の行いを見て、それに習い、五つの人の道を教え、人それぞれ天から授かった役割を知らせるとともに、努力して実行すれば、個人としても立派に、家族は秩序正しく、国はよく治まって平和になるという。五つの人の道を儒学では、五常の「仁・義・礼・智・信」、五倫の「親、義、別、序、信」として、人間の道徳的本質とした。ただし、人の道については、人民が五倫の徳を行うようになったという解釈と、教育の内容が五倫であるという解釈があるという。つまり人間の道徳的本質と考えるのは、この教育内容とむすびつくという見方に基づいたからである。

梅岩は、「^{セイ}性ヲ知ル時八、^{ジヤウ}五常^{ソノハ}五倫ノ道八其中二備レリ」(「都鄙問答ノ段」注5)といい、すでに性を知れば、五常五倫の道、即ち人の人たるゆえんの道が、その中に備わっているという。この道を会得するためには、上下関係の中において、「分ヲ知ル」ことを説き、社

会における集団の秩序を維持することを目指したのである。特に忠・孝を強調し、人間関係の機能を円滑にしようとした梅岩は、心のあり方を中心に据え、私心を捨て去り、五常五倫の精神を強調して、倫理的価値観を見出したともいえる。

一 現代の道德教育

現代の社会では、生命の軽視、倫理観の欠乏によって、幼い子や未成年者が殺人者になるという悲惨な事件が、多く見られるようになった。この起因に、人と人との関わりの希薄さがあり、そこには自己中心的な物事の判断、独断、偏見があるといえよう。これは小・中・高の学校教育における道德指導の問題ともかかわり、教育現場での重要課題が提示されていると考えられる。

すでに文部科学省の『小学校学習指導要領解説』の「第1章 総則」にある「第一教育課程の一般方針」の二に、道德性の基盤を養う目的と必要事項について、次のように述べている。

人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心もち、個性豊かな文化の創造と民主的な社会及び国家の発展に努め、進んで平和的な国際社会に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤として道德性を養うことを目的とする。

「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念」と冒頭にいうのは、人間への尊厳である。差別をもたないで人間を尊重する。「家庭、学校、その他社会」というのは、学んだものをどこで発揮するのかを具体的に述べる。「豊かな心もち、個性豊かな文化の創造」は人間の心が生み出す豊かな文化を形成していくことである。「民主的な社会及び国家の発展」は社会に貢献することである。「平和的な国際社会に貢献」するのも人間としての役目である。「未来を拓く主体性のある日本人を育成する」は、まさに未来のために創造して開拓していくには、日本人としての主体性、つまり自覚をもつ人材の育成をいう。「その基盤として道德性を養う」は、その基盤になるのが、道德性であるという。この道德性を養う場が、学校教育の現場であると述べている。

じつに道德教育の必要性は、生きていくうえで、人間と人間の接し方の基本になるからである。ここにみる人間の尊重という教育が、なされていれば、殺人という問題も起こらないのである。しかし現実には、道德性というものを、教育の世界だけに委ねていて、社会に役立たせる基盤であることを、家庭の場でも教えていないことが結果として顕現してい

るのであろう。

これから変化の激しい社会を生きるために必要なことについても、次のように示している。

- 一 美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性
- 二 正義感や公正さを重んじる心
- 三 生命を大切に、人権を尊重する心などの基本的な倫理観
- 四 他人を思いやる心や社会貢献の精神
- 五 自立心、自己抑制力、責任感
- 六 他者との共生や異質なものへの寛容

などの感性や心、倫理観、社会貢献の精神、自立心、自己抑制力、責任感、寛容などによって、道徳性を身につけることを述べる。しかし、ここにあげられるものは、社会に対する道徳性からかけ離れている。これらが自己の形成、人間の形成であり、道徳の目指す他人を尊重するための重要性にむすびついていない。ただし、自己形成が他人への尊重にむすびつくことは誤りではない。それでも「美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性」と、どのように道徳がむすびつくのかは疑問である。「他者との共生や異質なものへの寛容」も問題であろう。尊重するために寛容がどこまで許されるか、寛容が「他者との共生」にむすびつくであろうか。尊重するのであれば、すべてを寛容できるとはいきれない。こういうものへの疑問をもたせるような表現は、道徳教育を学ぶ低学年に、通じるであろうか。

こういう理念、目的を条文で明示するよりも、重要となる語彙をあげ、それを語る、石門心学の梅岩の教義には、道徳教育の基盤となる要素が残されている。すでに江戸時代に道徳性を強調する梅岩の卓見が、長く教えとして伝承されてきた結果が、近代から現代への道徳教育のなかに花開いたとみるべきであろう。その手がかりとなるものを、いくつかあげながら考察していこう。

二 梅岩にみる道徳教育の教え

1 「愛敬ノ心ヲ知ベシ」(愛敬)

梅岩は、父母に仕える道として、愛と敬との二つがあるという。この「仕える道」とは、

自分をこの世に誕生させてくれた父母に対して、どのように従うかが、父母への恩であるかのいみをもつ。そのまま父母を尊ぶことになる。そのために必要なのが、愛敬となるのである。

父母ニ^{ツカマツルミチ}事道ハ、愛ト敬トノニツナリ。愛ハイツクシミアイスル心ナリ。敬ハツハシミウヤマフ心ナリ。然ルニ^{シカ}汝ハ、父母ノ^メ命ヲ用ヒズシテ心ヲ^{イタマ}痛シム。心ヲ痛シムルハ、愛心ナキガ^{ユヘ}故也。命ヲ^{モチヒサル}不用ハ敬心ナキガ故ナリ。愛敬ノ心ナキハ鳥獸ニ同ジ。汝ハ世ニ^{ヨバ}呼ルハ、ホドノ孝ヲ問。聖賢ノ孝ヲ^{キカ}聞ント思ハズ、^{ハヤクアイタイ}早愛敬ノ心ヲ知ベシ。愛敬ノ心ヲ^{シラ}知バ、聖賢ノ孝ニモ到ルベシ（「孝ノ道ヲ問ノ段」注6）

愛は、いつくしみ愛する気持ちであり、敬は、慎み敬う心構えである。よってあなたは、父母の命令に従わないで、心配させている。心配させるのは、愛する気持ちがないからである。命令に従わないのは、敬う心がないからである。愛と敬の心がないのは、鳥獸と同じである。あなたは、世間でいわれている孝行とはどのようなものかと聞き、聖賢の孝行もどのようなものかと聞こうと思うならば、若い時期に愛と敬の心を知らなければならない。愛敬の心を知ると、聖賢の孝行を知ることができるのである。

梅岩は、五常五倫の「仁・義・礼・智・信」と「親、義、別、序、信」を常に心がけ、父母に対して「思いやる心」がなければ、聖人の孝にも辿り着かないという。愛敬は、人間に与えられた尊いもので、この心をもつことができるのは、人間だけで、この心をもたないものを「愛敬ノ心ナキハ鳥獸ニ同ジ」と述べた。梅岩は、弱肉強食の鳥獸の社会では、弱いものは、強いものに命を脅かされ、奪われる。そういう命を脅かし、そして命を奪う鳥獸と同じであるという。

梅岩は、正しい生き方を示す聖人・賢人の孝行を実行するためには、「早愛敬ノ心ヲ知ベシ」と述べ、若い時期に愛敬を知る必要性を説いた。この若い時期とは幼いときのことであり、現代の幼時教育、初等教育の時期にという意味である。もちろんその時期に愛敬の心を知ることが困難であろう。だが愛敬の心を育てる時期としては適切であり、その時期にその基盤を形成することが大事である。つまり愛する気持ち、敬う気持ちをもつこと、もたせることが必要なのである。そういう指導こそ、道德教育の使命なのである。それを具体的に、どういう考えをもつべきか、愛するとは人を傷つけないという言い方もあろう、また人の意見をきくことが敬うことであるという考え方もできよう。

愛し敬う心を幼い時期から身に付けると、親に孝行する心ができるのである。

2 「父母ノ安否ヲ問ハ子ノ道ナリ」(孝行)

梅岩は、子の親に対する心がまえを次のように説く。

マツ^{マツ}ツカフ^{ツカフ}先親二事 マツル者ハ、ユウベ^{ユウベ}ヨクイネ^{ヨクイネ}アシタ^{アシタ}ハヤクヲキ^{ハヤクヲキ}テ父母ノ安否ヲ問ハ子ノ道ナリ
 (「或人親へ仕之事ヲ問之段」注7)

子の親への孝行は、親が床につくの確かめてから休み、親が起きる前に子は起きるとい
 う、親を思う心が子の道という。子の道とは子供としてのあり方である。そうはいても
 子供の道というものを、どのように子供に諭すのか。これは問題でもある。しかし、子供
 に子供としての親を思う気持ちとは、どのようなものを教えることは大事である。子供
 への教えは幼時教育、初等教育での道徳教育の一つとしてあるからである。梅岩は、子の
 心の基本を愛敬とし、親を慈しみ、尊敬する「愛敬」の心によって、父母の安否を問い、
 子としての道を踏み行ふことができるとした。これを「孝行」と説く。

梅岩は、親子の関係を「父子有レ親」とも捉え、仲のいい関係を重視した。仲のいいこ
 とは、互いに穏やかな気持ちになり、精神的安定を維持することができるといえる。また
 梅岩は、「孝行ト云ハ、只^{コノロザシ}志^{ヤシオフ}ヲ養^{ヤシオフ}ヲ本トス」(「或人親へ仕之事ヲ問之段」注8)とい
 って、親に仕えて孝行するには、親に対して孝行しようとする志を作ることが大事であるとい
 う。そうすることで、つねに「愛敬」の心を身に付けて、実践することが、親子の関係を潤わ
 せるのである。

梅岩は、心を知って、学問をすることが、人間の生き方を学ばせ、方向性を導き、本来
 の人間の姿となることを示唆した。梅岩の教えの『都鄙問答』巻之二にいう、「学問ノ至極
 トイフハ、心ヲ尽シ性ヲ知り、性ヲ知レバ天ヲ知ル」(「或學者商人ノ學問ヲ譏ノ段」注9)が、
 ここでもむすびついてくる。

孝行をすることがどういうことか。それを子供のときから教えることによって、
 親の存在を考えるのである。親に対する愛敬と同じように、孝行は愛する、敬う上にある
 ものであり、その実践が孝行と考えてもいいだろう。ただし、愛敬とは異なって、孝行は
 形として現れてこない。なにをしたら孝行というのか、どういうことが孝行なのか、その
 具体的なものを表現できなくても、「孝行ト云ハ、只志ヲ養ヲ本トス」というように、その

志が大事なのである。幼児教育、初等教育における道德教育では、形に表されないものを、心におもうこと、心にもつこと、それが大事であると教えることになるが、ただ思えばいいのではなく、もう一つの愛敬とともに教えることが、理解させやすいであろう。行動をすることよりも行動したいと思う心がけにあるのである。

3 「飢人ヲ救フテ不^{コロサザル}殺^{ウエ}八人ノ道ナリ」(救済)

梅岩は、よりよい社会の建設に貢献し、よりよい社会活動をするための、貧しいものへの救済をすべきであると主張した。「飢人ヲ救フテ人ヲ不^{コロサザル}殺^{ウエ}八人ノ道ナリ」(「或學者商人ノ學問ヲ譏ノ段」注10)といて、飢えた人を救って、人を殺さないようにすることが、人の道であるという。救済が人の道になるのである。救済がどのようなものであるのか、金銭的なものでの救済をいっているのではない。現代のボランティアであろう。しかし、ここには孝行と同じように、形で現すことがいいのか、形で現さないことがいいのかは、後者の考え方が大事であるが、時には金銭での救済も必要になってくる。どんな救済することでも、それは人を生かすことになるからである。それをしないと殺すことにもなると強くいう。これは人の命を守るための目的で行うのではない。心からの救済である。大義名分による救済では、梅岩のいう救済ではない。人間愛を根本に置く人間尊重の精神は、普遍的な倫理観でもある。

元文五年(1740)庚申の冬から、寛保元年(1741)辛酉の春まで、不作のために困窮する人に、まったく布施をする人がいないとき、梅岩は、まっさきにこの状況を救うために門人を各所に派遣し、実体調査をさせた結果を知り、救済をするのであった。

極^{ごく}月廿八日より日々所をかへ、錢を持行きて、施したまへり。翌年にいたり正月二日よりは、所々に布施する人^{おびただ}夥しくありしなり(『石田先生事蹟』注11)

十二月末の金銭による救済からはじめ、正月にはいるところでの救済が行われたという。梅岩の救民活動の精神は、「銘々八世ヲ互^{タガヒ}ニシ、救^スヒ助^{タスク}ル役人ナリト知ラル」(「或人主人行状ノ是非ヲ問ノ段」注12)を根底に置き、互いが助けることを人間の役目と知るべきであるという。梅岩の門人や周囲の人たちは、梅岩の判断にしたがい、救済することの大事さを学び、共に取り組むことを実践したのであった。

この救済ということをも道徳教育で教える一つとするのは、どんなことでも人助けするこ

とによって、人間の生命が救われることの重要性を知るためである。そこには愛敬もともなっていてよい。どんなに小さなことでも救済する心を養うことは、やはり幼児教育、初等教育のときに、教えることが、大人になっていくにつれ、恥ずかしさを知るようになると、素直に救済をする心がでてこなくなる。自然に救済に対する気持ちが湧くように説くには、救済自体が自然でなければならない。救済に道徳性があるというのも、梅岩のような素早い行動を必要とするには、常識という概念がなければならない。救済という常識を、若いうちに身につけることが必要であるからである。それを誰が教えるかを、共通の主題として教育の現場で教えるところに意義があるからである。

4 「正直ニヨツテ幸ヲ得タリ」(正直)

梅岩は、亡き父の咎を自分が背負い、それを殿様への恩を忘れない『都鄙問答』巻二に、次のように述べる。

亡父ガ咎ヲ身ニ受ル孝心、殿ヘノ忠義彼此後々ニ至テモ、為ニ成ベキ者ナリトテ、古借ヲ聞届合力致シ、用向ヲコレマデノ通りニ云附ヨト有リ。此正直ニヨツテ、幸ヲ得タリ（「或學者商人ノ學問ヲ譏ノ段」注13）

父の咎を負うことを孝行というのは、仕えてきた殿へ迷惑をかけないという忠義であり、それが仕える身としての行為とする。その後も、昔と同じように、殿様の御前にも列することができるのである。この咎を負うことを言明することの正直が、ふたたび幸を得ることになるのである。商人が品物を納入できなくなるために、咎を追うことで、以前と同じ商いができる。正直であるということは、幸を得るのである。つづけていう。

殿様ノ高恩ヲ忘ズ。高直ナル者ヲ差上マジキト思フ實ト、父ノ奢ヲ隠ス孝ト、我正直ナル所ヨリ役人ヲ言^{イヒカス}掠ル心ナキト此三ツノ徳ヨリ我身ノ幸トナル

ここまでの一文によって、父の咎とは豪奢、贅沢をすることの咎であった。商人の心は、殿様の恩を忘れないで、高い値段の商品を納めようとしない誠実な心、父親の贅沢な生活のために貧乏になったことを隠そうとする親への孝心、役人をごまかすことのできない自分の心とがあらわれて、実・孝・正直の心の三つの徳を持つことが、自分の幸となるので

ある。

梅岩は、その場限りの嘘でのがれようとする商人は、必ず世間が成敗する結果となることを述べている。嘘をついたりごまかしたりすることは、社会的に許されることではない。嘘をつかないことは、人間としてあるべき姿であり、社会生活において、犯してはならない言動である。梅岩は、誠実な心は、まじめで真心がこもっていて、尊い心であると教える。貧しい現状を隠さないで、素直に率直にいう商人の心は、人間が生きるための心でもあった。

梅岩は『都鄙問答』巻二で、「商人八正直ニ思ハレ^{モチトケ}打解タルハ互ニ善者と知ルベシ」(「或學者商人ノ學問ヲ譏ノ段」注14)といて、商人は正直であると思われることによって、互いの心は善となるという。また、「商人モソノ如ク自然ノ正直ナクシテハ、人ト竝ビ立テ通用ナリ難シ」(「或學者商人ノ學問ヲ譏ノ段」注15)ともいって、商人の本心が正直でなければ、他人と同じように並び立つことは難しいという。いかに正直が、生きていく上で重要なことかを梅岩は、説いているのである。

いままでの愛敬・孝行・救済は外に向かったの行為であるのに対して、正直は内に向かったもので、自分のための行為であると教える。このことは道德教育において、外に向かう親のため、人のためだけではなく、内に向かう自分のためも大事なのである。外ばかりへの公正に欠ける考え方を、別の角度から教えるのも、道德教育の現場での対応となつてこよう。幼児教育、初等教育で教える正直とは、その逆の嘘をつかないことへの指導となつてこよう。

5 「拾ヒシ栗ヲ反シニ往キ」(慈悲)

堵庵は次のことばで幼児期に知る慈悲について述べている。栗を拾って持ち帰り、父に見せたところ、父は「拾ヒシ栗ヲ反シニ往」くことをいわれる。その栗をもとにあった場所に戻させたのである。

我レ幼年ノ時古郷田舎ニテ不自由ナル山中ノコトナリシガ、秋ノ半ニ山ニ遊ブコト有シニ、初栗ノ時節来テエミ落ケルヲ、捨テ反リ中食給ブル時、拾ヒシ栗ヲ出、親ニ見セケレバ、其栗八何方ニ落テ有リシト問フ。我レ對ヘテソコノ、ソト云ヘバ、其処八山八手前ノ内ナレドモ栗ノ木八他所山ヨリ落タル栗ナリ。其詮義ナシテ拾コト不屈ナリト云ツテ、食半反シテマイレト大イニ戒ラレタリ。其時ニ拾ヒシ栗ヲ反シニ往キシ

八何程力惜シク覚エテ悲シク、父ヲ恨侍リシガ、コレゾ實ノ親ノ慈悲ト今ニコソ思ヒ
知り侍ル(『石田先生語録』巻十八。注16)

梅岩は、父から人の家の敷地にある栗の木から落ちた栗を、無断で持ち出してはいけない教育を受けた。落ちていた栗の実であっても、他人の敷地であれば所有者にひとこと断ることを教えた。これを親が教えることで、過ちをしないことになるのは「コレゾ實ノ親ノ慈悲」といって、親の慈悲心からの言葉であるという。後年にいたって、梅岩は、親のありがたさを知ったと述べているのである。これを道徳とするのは、理解することは、後年になってしることであるが、教えを学ばなければ、それを理解することにむすびつかないのである。教えるということは、後年になって役立つものでもあるのである。無駄であるか無駄でないかは、後年になって知るのである。道徳教育というものは、そういう学問なのである。

善悪に対して幼少から身につけさせなければならぬ親の義務を重視すると共に、偽りのない梅岩の心を、父への感謝の気持ちに変えさせた。ここに幼児教育、初等教育での道徳教育が、いかに大事であるかを述べていると考えられるのである。この父の教えによって、慈しみ哀れむ心を受け止めることができたのである。ここに慈悲という教えが生きた教材として、梅岩の体験のなかにあったのである。どんなことでも、すべて教える教材にすることで、教えの真実性ともむすびついて、その説くところに説得性を与えたといってもいいだろう。

三 現代の道徳教育 初等教育の道徳との関連性

すでに道徳教育とのむすびつきについて、述べてきたが、ここでは『小学校学習指導要領解説』から、とらえていこう。

1 「敬愛八心ナキ八野獣ニ同ジ」と「他人との協調」

初等教育における道徳教育は、生きる力の核となるもので、「いかなる場面でも、他人と協調しつつ自律的に社会生活を送れるようになるために必要な、人間としての実践的な力であり、豊かな人間性の重要な要素」(『小学校学習指導要領解説』注17)と定義付けている。生きる力となるひとつとして他人との協調をあげている。

梅岩は、愛を慈しみ愛する心、敬を慎み敬う心と捉え、「愛敬ノ心」の大事さをいう。しかもその「愛敬ノ心ナキ八鳥獣ニ同ジ」ともいう。愛敬をもたない鳥獣は、生きていくた

めには、強いものが弱いものを倒し、弱いものは、強いものの餌食となる。かたよりや差別がない社会は、愛敬があるために人間にとっては、住み心地のよい環境となっている。しかし、ひとりひとりの心は、私心私欲によって、偏りや差別を生み出そうとするのは、その愛敬を失っているからである。人と人とのかかわりは、わだかまりが生じ、人間関係を悪化させる。この悪化を防ぐ方法として、「他人との協調」が必要不可欠となるのである。人間だけがもっている大切な「他人との協調」は、「いかなる場面でも」「自律的に社会生活を送れるようになるために必要な」(『小学校学習指導要領解説』注 18) 基本であったのである。「他人との協調」こそが、人間同士のわだかまりを解決してくれるのである。梅岩はこの「愛敬」を早い時期に知ることが必要であるといい、「早愛敬ノ心ヲ知ベシ」という。初等教育での重要性を説いているのである。人間の人としての在り方、よりよい生き方を目指すための道德的行為を可能にする精神の基盤には、「他人との協調」が存在することを忘れてはならない。

学校教育の現場においての「他人との協調」は、教えるまでもない共同生活の基本ではあるが、時としてその強調が崩れるのは、他人に対する敬意が欠けているからである。敬意は心から尊敬することはいうまでもない。しかし、口答えしたりする反論は、いかなる理由があっても、してはいけない行為である。それを忘れてしまうのも人間である。そのために道德教育というものが、その軌道修正をする役目を示すのである。ある学年だけの道德教育ではない。毎日、毎週、その反省を促すためにも教育現場における道德教育は必要なのである。

2 「難義アレバ救^{スツ}コトヲ、我役目ト思フ」と「社会貢献の精神」

梅岩は、一般庶民の一家の長たる者は、親類中を自分の家のように思い、困難があれば救うことを自分の役目と考えて、つねづね儉約を思うことであるという。

下々モ一家ノ頭タル者は、親類中ヲ我家ノ如ク思ヒ、難義アレバ救^{スツ}コトヲ、我役目ト思フ者ナラバ、平常儉約ヲ思フヨリ外ニ心ハ有マジ。儉約ト云フ世ニ^{アヤマツ}誤^{シハキ}テ吝コト、思フハ非ナリ。聖人ノ約トノ玉フハ^{ヲゴリ}侈^{シリソ}ヲ退ケ法ニ従フコトナリ(「或人主人行状ノ是非ヲ問ノ段」注 19)

世の中の人が、儉約をすることを間違えて、けちなことだと思うのは、正しくないと思へ、

聖人がいう儉約とは、おごりを避けて定めにしたがうことであると説く。

『小学校学習指導要領』に、生きる力の核の一つに「社会貢献の精神」が記されている。これは、梅岩が述べる「難義アレバ救コトヲ、我役目ト思フ」ことにつながり、人道的な行いに通じるといえる。人間愛を基本にした倫理観は、道德教育の一環を担っているといえる。梅岩が述べる人を助けることを自分の役目と捉えることは、心が仕向けることであり、すでに述べた「他人との協調」の教説をうかがわせる。

救済することは、『小学校学習指導要領解説編』に、「他者との共生」を基本とする条文がある。これは「他人との協調」の基礎を培うことにつながる。幼い段階で救済の精神を育てることは、「社会貢献の精神」をつくる第一歩といえる。幼児・初等科における道德教育は、人道的な精神を築く上で道德性を養うために重要と考える。人を助けることは、安心できる環境を作り出し、共生できることを意味する。いかに人間は生きていくのかを示す梅岩の教えには、道德教育で謳う「他人と協調しながら、自主的に関わろうとする自己の育成に必要なこと」につながる。このことから、梅岩の教えを道德教育の場で積極的に知らせて、理解させることは、善悪の判断、救済の精神、生命尊重、人間愛などの心をもたせ、他者と協調しながら実践できる児童の育成へとつながるのである。よりよい社会をつくらうとした梅岩の教えは、人格形成をめざす現代の初等教育の道德にも有効にいかされるのである。

3 「^ヲ己^レ所^レ不^レ欲^勿施^人ノ玉フ」と「人権を尊重する心」

梅岩は、自分がいやだと思うことは、人も嫌うものなので、人にしてはならないという。

孔子モ己所^レ不^レ欲^勿施^人ノ玉フ。^{ワガイヤ}我否ト思フコト^{キヲ}八人モ嫌フモノナリ（「或学者商人ノ学問ヲ譏ノ段」注20）

人間尊重の精神は、道德教育の目標の中で、「生命の尊重」「人格の尊重」「人権の尊重」「人間愛」などの根底を貫く精神である。日本国憲法にも「基本的人権の尊重」や教育基本法の「人格の完成」や教育連合教育科学文化機関憲章（ユネスコ憲章）の「人間の尊厳」が記されていることでもわかる。

民主的社会において人格の尊重は、自己の人格だけではなく、他の人々の人格をも尊重することである。また、権利の尊重は、自他の権利の主張を認めると共に、権利の尊重を

自己にも課する意味をもつ。互いに義務を果たすことを求められるのである。権利の尊重は、相互の間を尊重し、信頼しあう人間愛の精神によって、支えられなければならない。幼児教育、初等教育において、人間関係の中での児童の内面的な人格の目覚め、普遍的な人間愛の精神の向上が重要である。

人間存在がそのまま生命存在を意味し、生命の畏敬の念は、かけがいのない生命に気付く、生命のあるものを慈しみ、恐れ、敬い、尊ぶことになる。これらを理解した上に、自他ともに生命の尊さや、生きるすばらしさを自覚できるのである。生命に対する畏敬の念に根ざした人間尊重の精神を培うことによって、人間の生命が、あらゆる生命との関係や調和の中で、存在し、生かされていることを自覚する。生命あるものすべてに対して、感謝の心や思いやりの心を育み、よりふかく自己を見つめることができる。

梅岩が述べる「己所レ不レ欲勿施人ノ玉フ」は、幼児教育、初等教育の道德教育において、人間としてどうあるべきか、どのように生きていくべきかという人間のあり方や生き方に気付かせ、自覚を深めさせていくことの場合なのである。

『小学校学習指導要領解説』の「道德教育目標および内容」に「よい友達関係を築くには、互いを認め合い、様々な場面で学習活動や生活を通して助け合い、理解し合い、信頼感や友情を育てることが大切」(注21)と述べる。「他人との協調」は、梅岩が幼児の段階での「愛敬の心」の必要性を説いている。「愛敬の心」は、人間尊重には、必要不可欠な心であり、尊いものとして重く心に受け止めて理解することが重要である。梅岩の教えは、現代の子どもの自殺やいじめの問題、環境の問題を考える時、人間尊重の精神の重要性を考えさせてくれる。人間が人間として共によりよく生きていく上で、最も大切にしなければならないのが、「人権を尊重する心」である。幼い頃から、道德の場で、「愛敬の心」をもつことの大切さを知らせ、日々実践することを学ばせると、悪心は善心にかわり、柔軟な心となって、互いを理解し、信頼し、認め合うことができるのである。よりよい人間関係は、安心できる生活環境をつくりだすといえる。

4 「我身ヲ修メ役目ヲ正ク」と「公正さを重んじる心」

梅岩は、青砥左衛門尉誠賢アヲト ノゼウサネカタの裁判の判定を『都鄙問答』巻之二で、次のように述べる。

我身ヲ修メ役目ヲ正ク勉メヨコシマ邪ヨコシマナキ八君ヘノ忠臣ナリ。今治世ニ何ゾ不忠ノサムライ王アラ
ンヤ。商人ノ二重ノ利蜜々ノ金ヲ取ルハ、先祖ヘノ不孝不忠ナリトシリ、心八士ニモ

劣ルマジト思フベシ」(「或学者商人ノ学問ヲ譏ノ段」注22)

青砥は、自分の役目を正しく勤め、不正のないのが忠臣であるという。二重の利益や内密の金を受け取ることは、先祖への不忠・不孝であるとわきまえることで、侍にも劣らないようにすることであった。梅岩は、自分の置かれている立場を知り、明白で正しい判断をすることが、人間としてあるべき姿と捉え、疑う余地のない行いをするを説いた。

『小学校学習指導要領解説』の「内容項目の指導の観点」に、「児童が生活する上で必要とされる公德心や社会規範を守り、それらの精神を日々の生活の中に発展させる児童を育てようとする」(注23)とある。

これは、児童が成長する過程において、社会や集団の様々な規範を身につけていくことの必要性をいう。公共心や公德心を養い、法やきまりを守り、権利・義務を大切にする精神を、しっかり身に付けることが大切とされている。この時期は、自己中心的な言動が強く、自分勝手な行動をとることが多い。しかし、身近な日常生活における出来事の中で、皆が使う物を大切にすることや、きまりを守る態度を育てていくことが重要とされる。また、自分の役割や責任を自覚させて、正しいことや正しくないことの判断力を身につけることも大事である。正しいことは進んで実行すると共に、正しくないことは、勇気をもってやめる態度を育てる必要がある。疑う余地のない判断は、不満の残らない環境を生み出し、社会の中で守るべき道徳を知らせる。

児童が成長する過程において、自分に課せられた社会的責任を果たすことは、社会に対する奉仕や公共の役立つ喜びをも味わうことになるのである。「公正さを重んじる心」によって、差別や偏見に気付き、公平で公正な態度を養うことを通して、社会正義について自覚を深めることが肝要とされる。人格の基盤をなすものとして、「公正さを重んじる心」は、幼児教育・初等教育において、積極的に育まれることが重要である。

おわりに

梅岩は、『中庸』で「性を知ること・心を知ること」について、次のように述べる。

天ノ命^{メイコレヲ}之謂性率性之謂道、性ヲ知ラズシテ、性ニ^{シタガフ}率^シコトハ得ラルベキニアラズ。性ヲ知ルハ^{ガクモン}學問ノ^{カウレイ}綱領ナリ。我^{アヤシキ}怪^{カタル}コトヲ語^{ケウシヨク}ニアラズ。堯舜^{ヨウシヨク}萬世ノ法トナリ玉フモ、是^{コレ}率^シ性^ニ而已。故^{カルガコヘ}ニ心ヲ知ルヲ^{ガクモン}學問ノ^{ハジ}初メト云。然ルヲ^{シンセイ}心性ノ^{サタ}沙汰ヲ^{ソク}除、外ニ^{シヨク}至極

ノ學問有コトヲ知ラズ。^{バンジ}萬事ハ皆心ヨリナス。心ハ身ノ^{アルジ}主ナリ。主ナキ身トナラバ、
^{サンヤ}山野ニ^{スツルシニン}捨死人ニ同ジ。其主ヲ知ラスル^{ソノアルジ}教ナルヲ、^{ヨシヘ}異端ト云ハ如何ナルコトゾヤ(「都
 鄙問答ノ段」注24)

学問をする意義を「性ヲ知ル^{ガクモン}ハ^{カウレイ}學問ノ綱領ナリ」(「都鄙問答ノ段」注25)といい、性を知ることが学問の肝要と説いた。また「^{カルガコヘ}故ニ心ヲ知ル^{ガクモン}ハ^{ハジ}學問ノ初メト云」(「都鄙問答ノ段」注26)して、正直な心・一生懸命な心・考える心(時間の使い方を生み出す知恵)などを、学問の初まりと捉えている。

天の命じる所が本性で、この本性に従うのが道である。本性を知らないで、本性に従うことはできない。本性を知ることが学問の肝要である。堯・舜が、長い間、人の手本となることも、その本性に従ったからである。よって学問は心を知ることから始まるのである。人の心と本性の問題を別にしては、学問の世界は存在しない。万事みな心に発する。心は身体的主人である。主人のない身体は、山野に捨てられた死人と同じであろう。その主人を、人々に教えようとするをどうして異端といえるであろうか、と梅岩はいう。

『中庸』を用いる梅岩の教えは、由緒正しい学問であることを主張し、人の心と本性を問題にして、理・性・心を会得することこそが、学問をすることであるという。人の心と天の命じる本性との源流を、「心」と定義付けて、身(体)と心との一心同体であると捉えた上で、人間の心のもち方で、どのようにも生きられることを示唆した梅岩は、人のひとりたる道を「心」に位置付けたのである。

梅岩は、人間関係を柔軟にし、社会秩序を維持するためには、五常五倫を実行し、私心私欲を取り除き、互いに助け合うことを重視した。梅岩の教えは、快適な社会を構築することにあつた。よりよい社会の建設に貢献し、よりよい社会活動をするための、貧しいものへの救済をすべきであると主張する。梅岩は、心に英知と勇氣、忍耐を具え、経済的自立と救民の精神をもつ商人を、育て上げる道德教育の基礎を提唱したのである。

人間の生き方に五常五倫・忠義・孝行・善悪・勤勉・救済などを心がけることで、社会における人間のもつ道德の基礎を定義付けた。梅岩の述べる道德観・倫理観は、大人になって知る社会での道德の基盤となるものであった。「早愛敬ハ心ヲ知ベシ」という幼年の心の教育の必要性を説いた梅岩の教えを、現代の初等教育の道德で取り入れることによって、自己の形成・人格の形成におおいに役立つといえる。人間としてどのように生きるかを教えた梅岩の教えは、時代が変わっても受け入れられるものである。よりよい社会をつくる

一員を育成するためには、「敬愛ハ心ナキハ野獸ニ同ジ」・「難義アレバ救^{スクフ}コトヲ、我役目ト思フ」・「^{ヲノレガトコロヲ}己^{ザル}所^{ホツセナカレトホドコスコトニ}レ不レ欲勿施人ノ玉フ」・「我身ヲ修メ役目ヲ正ク」などの梅岩の教えを、現代の初等教育の場に取り入れ、十分知らせて実践できる児童の育成をする必要がある。

心のもち方を知らせる梅岩の教えは、初等教育の道徳にとりいれ、『小学校学習指導要領』で謳われている人間尊重・生命尊重・人権尊重・人間愛などの精神を、より一層深めていくことができるのである。安心できる社会を構築する梅岩の教えは、現代の初等教育に積極的に取り入れることが重要である。

注

- (1) 柴田 實著『石田梅岩全集 上巻』清文堂出版 1972年 P.4 から引用する。
- (2) 注(1)に同じ
- (3) 注(1)に同じ
- (4) 注(1)に同じ
- (5) 注(1)に同じ P.5
- (6) 注(1)に同じ P.22
- (7) 注(1)に同じ P.60
- (8) 注(1)に同じ P.59
- (9) 注(1)に同じ P.71
- (10) 注(1)に同じ P.88
- (11) 柴田 實著『石田梅岩全集 下巻』清文堂出版 1972年 P.636 から引用する。
- (12) 注(1)に同じ P.157
- (13) 注(1)に同じ P.79
- (14) 注(1)に同じ P.80
- (15) 注(14)に同じ
- (16) 注(11)に同じ P.166,167
- (17) 文部省著『小学校学習指導要領解説』(道徳編)文部省 1999年 P.118 から引用する。
- (18) 注(17)に同じ
- (19) 注(1)に同じ P.172

(20) 注(1)に同じ P.74

(21) 注(17)に同じ P.37

(22) 注(1)に同じ P.90

(23) 注(17)に同じ P.39

(24) 注(5)に同じ

(25) 注(5)に同じ

(26) 注(5)に同じ